個性や社会性の伸長を目指して

大切な子どもたちのために

私は、小さな頃から幼稚園教諭に憧れ、短大を卒業し念願の幼稚園に就職をした。期待に胸を膨らませながらいざ保育をしてみると思うようにいかず、思い描いていた仕事のイメージとは異なっていた。先輩保育者に付いていくことに必死で、一日を過ごすことで精一杯の保育だったように思う。目の前で意見を交わす先輩に圧倒され、分からないことや困ったことがあっても、誰に相談していいのかも分からず、一人で抱え込むことが多かった。体調を崩して休んだり早退したりすることに抵抗を感じるような状況だったため、今思うと本当に大変な新任の一年間だったと懐かしく感じる。しかし、この一年間を無事に過ごせたことは、保育の仕事の基礎になり、自信にもなったのかもしれない。

二年目は、一年目の経験を糧に「次はこうかもしれない」と慌てずに保育に取り組めるようになっていった。そして三年目以降からは「もっとこうしたい」と自分のやりたいことや考えが見付けられるようになり、保育に向かう姿勢が変わっていったように感じる。子どもたちと過ごす日々がますます楽しくなり、一生懸命になればなるほど、子どもたちからの反応が返ってきて、何よりも笑顔が見られることがうれしくてたまらなかった。

そのような中、行事「お店屋さんごっこ」での出来事である。当園のお店屋さんごっこは異年齢で行われ、みんなで話し合いながら作りたい品物を決めて、子どもが活動を進めていくのだが、その頃の私は、子どもたちの意見を都合よく切り取り「こういうことだろう」と自分の経験や考えから答えを決め付けて進めてしまっていた。そのため、子どもたちとの考えやイメージがすれ違い、せっかくの楽しい活動がそうならなかったことがあっ

た。

一番大切にしなければならない子どもたちの思いを見過ごし、過程より結果を気にしてしまっていることに、はっと気づいたのは様々な研修に多く参加するようになってからだと思う。研修で学んだことで、自分自身の保育を見つめ直すよい機会となり、保育を振り返り、記録に残すことをきちんと行うようになった。それまでも記録や反省は行っていたが、皆で話し合い、意見を交わすことができるようになったことで、より記録が生きていると感じることができた。研修だけでなく、他園を見学に行く機会もあり、好事例を参考にできたことや、職場の環境、働き方の変化も影響があったように思う。

今は、子どもたちのその時の姿に合った保育を心掛け、行事内容について教員間で話し合い、意見を出し合いながら計画を立て実施している。当たり前になっていたことを見直すことで、時間と心にゆとりができ、子どもたちと一日一日を楽しく過ごすようになった。

日々の保育の中で上手くいかないことや不安になることもたくさんあると思うが、何度失敗したとしても、その経験こそが自分の宝物となる。次に生かすことこそが大切だと思う。勤務年数だけが保育に幅をもたせるのではないと思う。いろいろな意見を取り入れるべきだと思う。型にはめるのではなく、目の前にいる子どもの姿を柔軟に捉え、一人一人との関わりを大切にしながら、何より楽しい保育を目指してほしい。

「大切な子どもたちの笑顔が見たい！」これこそが私が今まで保育者を続けてきた原点なのだと感じ、子どもの笑顔が自分自身も笑顔にしてくれていたのだと、この機会をいただき思い至った。皆さんにもぜひそう感じてほしい！

認定こども園愛泉幼稚園　　石島　あさみ

分岐点

私は、保育者になって三年で一度目の職場を退職した。他の仕事もしてみたいという思いからであったが、今になって分かることは隣の芝生が青く見えたのだと思う。仕事を辞めて次の職を探し始めた頃、学生時代の友人から保育の話を聞く度に、嫉妬心のようなもやもやした感情を抱くようになった。そしてようやく気付いた。「あぁ、私は保育の仕事が好きだったのだな」と。そこから新たな気持ちで就職活動を試みるも、今の世の中のような保育士不足ではなく、就職氷河期で、中途採用の正職員の募集は、ほぼ見付からない。臨時職員や病院の託児所で働きつつ職業安定所にも時折足を運んだ。現在の園から声を掛けてもらい、幼稚園教諭として再スタートを切るまでに四年ほどかかった。

新しい職場は、今でこそ職員数は多いが、当時は少なく、アットホームな職場だった。そんな温かな職場で、私は毎日が楽しくて仕方なかった。幼稚園バスも、クラス担任という責任感も、持ち帰りの仕事でさえも、すべてが私の心を躍らせた。来月の壁面は何にしようかな、この話をしたらどんな反応がくるかな、私の頭の中は園の子どもたちでいっぱいになった。

しかし、月日が経つにつれ、楽しさはプレッシャーに変わっていった。クラスをまとめなければ、学年を引っ張っていかなければ、仕事ができない先生なんて絶対に思われたくない。私の頑固で負けず嫌いな面が空回りし始めた。

ある年私は、年長組を受け持っていた。クラスには特別支援を必要とする子が三名いた。それぞれ自閉症、ダウン症、精神運動発達遅延（Ｙちゃん）であった。クラスの子どもた

ちは当たり前に関わり、三人が困っている時にさりげなく手助けをしてくれる、とても思いやりのある優しい子どもたちだった。

そのような中で、ただ一人、私は焦っていた。運動会の練習、遊ぶ時間の確保、給食…頭の中は時間を無駄にしないスケジュール調整であふれていた。保育室から昼食をとるランチルームまで子どもの足で二分程の距離だろうか、その距離でさえも瞬間移動したいと思っていた。足取りが速くなっていた私に、ある女の子が投げ掛けた。

「先生、Yちゃんに合わせてあげようよ！」

私は、はっとした。時間が一瞬止まった。振り返るとYちゃんは自分の精一杯の歩ける速さで速足の私に必死についていこうと歩いていた。なんだか涙が込み上げてきた。何に焦っていたのだろう。周りが見えていなかった。恥ずかしい。

「そうだよね、先生慌てちゃっていたね。ごめんね」

その頃から私は焦るのをやめた。とりあえず一呼吸置くことから始めた。時間を気にしすぎるのもやめた。子どもたちの反応や思いを一番に考えるように心掛けた。

幼稚園の仕事は楽しい。やりがいもある。「ありがとう」と年度末に子どもや保護者から言われると、すべてが報われた気持ちになる。これがあるから保育の仕事はやめられない。まだまだ人としても保育者としても未熟だが、迷ったとき、焦ったときに、立ち止まって振り返りができる柔軟な保育者でありたいと思う。そして、何よりも子どもたちとの今の時間を楽しんでいきたい。

認定こども園黒羽幼稚園　　田口　裕美

学業指導の充実を目指して

現在、私は茂木町学力向上推進リーダーとして、茂木町四校の先生方と日々の授業改善に向けて取り組んでいます。これまでの教師生活を振り返り、「学業指導の充実」に向けて、取り組んできたことをお伝えしたいと思います。

まずは、学びに向かう集団づくりが大切です。話が聞けない、安心して自分の考えが言えないクラスでは、どんな手立てを講じてもよい授業とはなりません。私は、次の三点を特に意識して取り組んできました。①一人一人を大切にすること。一人一人のよさを認め、生かすことを心掛けました。褒める・認める言葉掛けを多くすることにより、プラスの行動が多くなったり、子どもの自己肯定感が高まったりして、クラス全体の雰囲気がとてもよくなっていきました。②話をしっかり聞くことができるようにすること。教師や友達の話を聞きながら、反応（相づち、つぶやき）することを指導しました。自分の話を友達がよく聞いてくれることで、頑張って話そうという気持ちが生まれます。途中までしか話せなかったとしても、友達がつないでくれる（助けてくれる）ことが分かっているので、安心して話すことができます。よい聞き方ができるクラスは、よい話し方もできるようになっていきます。③「分からない」と素直に言えるクラスにすること。間違ったからこそ学べることが多くあることを体験させていくと、自分の考えを書いたり、説明したりすることに、より積極的に取り組めるようになっていきます。①～③の取組は、いずれも一貫した指導を継続することが大切です。ある場面では指導し、ある場面では指導しないということでは、指導を徹底することはできません。

また、学びに向かう集団づくりと並行して、「楽しい・分かる・学び合う」授業づくりを心掛けることが大切です。次の六点を特に意識して取り組んできました。①単元の学習を通して、子どもにどのような力を付けたらよいのか、指導内容を確認し、学習計画を立てること。身に付けるべき力を意識して、学習活動を考えていくことが大切です。②系統性を意識すること。既習事項は何か、今後どのような学習につながるのかを確認します。授業では、既習事項を活用して考えられるようにしていきます。③導入を工夫すること。子どもの日常生活と関連した内容での導入を心掛けました。「～したい」「なぜ？」を引き出すよう、問題提示や発問の仕方を工夫しました。④隙間の時間を作らないこと。自力解決の際は、時間を指定し、時間いっぱい取り組むことを指導しました。書いた文章を見直すこと（推敲の力を付けるため）、出た答えを見直すこと（求める数量と全く違っても気付かないということがよくあるため）、別の方法でできないか考えること、友達にどう説明するか考えること等、具体的に指導していきました。⑤学び合い（集団解決）の時間を多く確保すること。友達の考えを知ることにより、自分の学びが広がったり深まったりしていきます。自分の考えに付け足すことや新たに分かったこと等をノートにまとめる時間も確保するように努めました。⑥確かな学力の定着を目指すこと。その学年で定着すべきことは、確実に習得できるよう取り組みました。子どものやる気をアップさせるため、数値目標を決めたり、頑張りカードを活用したりしました。

集団づくりと授業づくりの相互の関連を図ったこれらの取組は、当たり前のことばかりです。当たり前のことを根気強く取り組んでいくことが、「学業指導の充実」につながると思います。

茂木町立茂木小学校　箕輪　尚子

これからも大切にしていきたいこと

教員としての経験が二十年を過ぎ、「ミドルリーダー」としての自覚と責任が求められる立場となりました。教員になりたての頃は、教師という仕事に、自分なりの理想を思い描きながら、無我夢中で過ごしてきた気がします。だから、子どもたちに自分の思いを熱く伝え続ければ、理解してもらえるだろうという、根拠のない安易な考えがありました。日常の指導は、まさに力技で対応することが多く、これまで数々の反省をしてきました。でも、これらの経験が教師としての自分を成長させ、これまで歩んで来られたのだと感謝しています。

そんな私が、今心掛けていることは、子ども一人一人を見守ることと、指導や対応にしなやかさをもつことです。子どもたちは、大人と同様に、様々な人間関係の中で生活しています。そして、自分なりの思いや考えをめぐらせ、時には迷い苦しみながらも、一歩ずつ前へ進み、絶え間なく成長しています。私には、教師として、一人の大人として、子どもたちを支え、見守っていく責務があります。見守るには、子ども一人一人の姿をよく見て、声に耳を傾け、寄り添うことが大切だと考えます。ただその時に、私がさらに大切だと感じたのは、子どもとの距離（距離感）です。

私は、ある児童との関わりの中で、このことを深く考えさせられました。この児童は、こだわりが強く、自分の思いや価値観にそぐわないと、しばしば感情が高ぶり、衝動的になります。八つ当たり的に、あるいはそのきっかけとなった相手に対して報復的に、感情を物にぶつけたり、時には相手に暴力を振るったりしていました。周囲から「困った子」

と見られてしまうような児童でしたが、関わっていく中で、「困っている子」であると気付かされました。普段の会話で、本児に寄り添い、共感的に聴いていくと、さまざまな思いをくみ取ることができました。自分の中で頑張りたいと思っていること、頑張っても結果がよくなかったらどうしようという不安、親の期待に応えたいという思い、それに対するプレッシャー…。初めは何気ないやりとりでも、本児との距離を縮めていくと、普段は表面に出さない複雑な思いが伝わってきました。一方で、こだわりがあるが故に、指示をしつこくされることを嫌がりました。私は本児に選択の幅を与え、判断を委ね、本児の思いを大切にしました。そして、距離をおきながらも、様子をよく観察し、適宜声を掛けることで、安心して取り組めるように努めました。

言うまでもないことかと思いますが、自分と子どもとの距離（距離感）には、物理的なものと精神的なものがあり、自分と子どもとでは捉え方・感じ方が違います。そして、物理的に離れていても、気持ち的には近く感じたり、物理的に距離を縮めようとすればするほど気持ちは離れていったりと、物理的な距離と精神的な距離（距離感）は一致しません。環境や心理状態、人間関係等によって大きく変化するものです。だから、この距離が正解というものはなく、探っていくことが大変難しく、面倒なことにさえ感じるかもしれません。距離を探ることは、距離感を共有しようと探っていくことではないかと考えます。さまざまな角度からアプローチし、子どもの反応や状況をしっかり把握しながら、柔軟に対応していくしなやかさが必要です。私はこれからも、子どもとの距離を探りながら、思いや考えに寄り添い、見守っていける教師を追い求めていきたいと思います。

足利市立富田小学校　内田　祥弘

私が生徒指導で大切にしていること

私の生徒指導を振り返ってみると、初任から二校目となる中学校での経験が大きな転機となった。初任校で学んだ学級経営や学習指導を新天地でどのように生かしていくか期待に満ちていた。しかし、その思いとは裏腹に、現実はそう甘いものではなかった。

私が、担当したのは一年生の担任だった。集団生活への意識が低く、学級内でのトラブルが入学当初から立て続けに起きた。学級経営どころか、クラス全体に落ち着いて話を聞かせることすら困難な状況だった。

学校全体がそのような状態であったが、職員室の先生方は明るく一体感のある雰囲気だった。また、頼りになる先輩の先生方からアドバイスをいただいたり、実際に指導をする姿を目前にしたりできたことは心強かった。そして、学校の方針で「生徒は学校で責任をもって指導する」という考え方が浸透していた。問題行動を繰り返し、学級での生活が困難な生徒に対し、別室で教員が対応する方針だった。この別室での時間が大変重たい時間ではあったが、私の生徒指導への意識を変えるきっかけとなった。

別室で生徒が見せる姿は様々であった。何を語り掛けても反応しない。そのまま時間だけが過ぎていき何も進展しないまま終わってしまう。また、こちらの目を盗んで逃げる。私がいようが強引に制止を振りはらって逃げる。自分の非を認められずに言い逃れを続け、謝罪の場をもつことができずに問題がこじれていく。どの生徒にも、共通して言えるのは、私の話が全く心に響かないということだった。自分の指導力の無さを痛感し、この現状を受け止めるほかなかった。

私は、どうすべきか悩み考えた。そして、今までの指導は生徒に対して配慮なき関わりであったことに気付いた。失敗をしてしまった生徒の気持ちに寄り添うことなく、ただ正しいことを伝えるだけの指導だった。

それ以来、まず始めに意識したことは、生徒の置かれている環境や背景を理解することだった。失敗をしてしまうには必ず理由があって、その部分への共感を示すことは生徒を大切に思うメッセージとなる。生徒に語り掛ける表情や声の抑揚が変化するのを実感できたことをよく覚えている。生徒からの反応も増え、話が伝わっていると実感できるようになったのもこの頃からだった。

そういった対話が成立するようになり、次に意識したことは正しいことをきちんと指導するということだった。生徒の置かれている立場や状況については理解し受け入れるが、「ダメなものはダメ」とはっきり言い切ること、そして納得させることだった。そこまでに築いた生徒との親和的な雰囲気を壊すことになり、勇気のいることである。しかし、しっかりと生徒と向き合った。眉間にしわを寄せて、声のトーンを下げて叱り、諭した。

これらのことを意識して生徒との関わりをもち続けた。生徒自身の行動にすぐに大きな変容はなかったがそれでもいいと思っている。そう簡単に人の考え方は変わらない。大切なのは、生徒一人一人と丁寧に向き合い、心に響く、重みのある言葉で語り掛けていくことだと思う。そして生徒の様子を温かく見守り、成長を期待していくことだと思う。

この中学校で学んだことは、今も私の生徒指導の軸となっている。

鹿沼市立粟野中学校　　伊奈川　正通

生徒指導と人とのつながり

私は今年度で教職十六年目を迎えます。これまでの教職生活の中で多くの先輩・同僚・後輩に出会ってきました。現在は、生徒指導主事という立場をいただき、日々よりよい学校にするために自分にできることは何なのかを考えて職務に当たっています。さらに、現在勤務している学校は、新規採用教員として四年間を過ごした学校でもあります。当時は駆け出しで、右も左もよく分からないまま「こんな先生になりたい」と目標を抱きながら、奮闘していた日々でした。今は教師としての駆け出しの時期に大変お世話になった大切な学校で恩返しの気持ちも込めて勤務しています。思い返してみれば、今日まで生徒指導を頑張りたいと思い過ごしてきた日々には、思い出深い先輩方の一言があります。

新規採用教員として赴任した当時、ある先輩教師から「新規採用の三年間は自分がどのような教師になるかを決める重要な時期だ。その間に目標とする先生を決めること、決めたら見て学んで真似すること、三年目を過ぎると周囲の先生方からは助言が少なくなる。その時までに自分の生徒指導を身に付けること」と助言をいただきました。この言葉は今も後輩たちによく話をします。自分自身でそのとおりだったと実感しているからです。採用から三年間は、先輩教師の集会での話の内容や話し方、表現、身振り手振り、身にまとう雰囲気など、すべてを真似することから入りました。多くの先輩方のよいところはどこなのか見付け、それらを自分のものにするように心掛けて研修を深めたつもりです。現在もこの姿勢は変わりませんが、この時期に身に付けた生徒指導についての考え方や方法が自分のベースになっていることは言うまでもありません。

二人目の先輩教師は「担任は学年の生徒指導担当者、学年の生徒指導担当者は生徒指導主事、生徒指導主事は学校内に留まらず市内全体というようにワンランク上の段階で物事を見て生徒指導に当たることの重要性」を話してくださいました。この考え方から自分自身が副担任から担任へ、そして学年の生徒指導担当から生徒指導主事へと役割が変化したときに柔軟に対応するための準備ができたと感じています。

三人目の先輩教師は、当時、生徒指導主事だった先生です。教科指導、部活動指導、そして生徒指導など、あらゆる指導の場面でこの先輩を模範として学びました。印象的な言葉もたくさんありますが、多くの助言をいただき、教師としての考え方の基本を教えていただきました。現在は、自分が生徒指導主事という立場に立ち、この先輩であればどのように判断しどのように考え、どのように動くべきと考えたかを意識していることが多いです。当時赴任していた学校には、生徒指導主事としての経験が豊富な先輩教師が多くおられました。その先輩方の教えも自分にとってはかけがえのないものです。

まだまだ挙げればきりがないくらい多くの先輩・同僚・後輩の先生方から、水分を吸い込むスポンジのように多くのことを吸収し、現在の自分が構築されていると思います。そして、現在もその方々とのつながりは続いており、自分自身が悩んだり、立ち止まったりしたとき、相談できる存在です。現任校にも多くの信頼できる同僚がいます。校長はよく「チームとして」とおっしゃっています。私はチームの中核として、これからも学び続け、多くの人とつながり続けようと思っています。

小山市立桑中学校　　相羽　克隼

私の三つの心掛け

私は十年近く生徒指導部長を務めています。当時から私は、生徒の話をよく聞くこと、生徒には粘り強く伝えること、授業を大切にすること、放課後や土日にはなるべく部活動の指導に行くことを心掛けてきました。この姿勢は今も貫いています。継続して頑張っていることがあれば、見ていてくれる人はいると思います。もちろん、その分野は人によって異なり、進路指導や授業研究の分野かもしれません。先生方の仕事を支援する分野の場合もあるでしょう。私の場合は、生徒・保護者や同僚のためになればと思って取り組んできた結果、生徒指導を任せてみようとチャンスをくれた人がいたのだと思います。

現在、具体的に私が心掛けていることを三つ紹介します。

まず、一つ目は基本を知ることです。私は立場上、生徒指導部長が集まる機会や研修が年に数回あることと、生徒指導関係の文書が回ってくることで、自発的に動かなくても学ぶ機会があります。しかし、全員の先生方にそのような機会は訪れませんし、基本を知ると言ってもどこから手を付ければよいのかも分からない人もいると思います。そこで、私はまず、『生徒指導提要（平成二二年三月文科省）』を読んでみることをお勧めします。この前書きに「生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書」とあります。もちろん、全部読むことが望ましいとは思いますが、自分の学校で起こったことについて辞書的に引いてみたり、自分の興味や不安のある内容について部分的に読んだりするだけでも勉強になります。少しの時間をとって、週または月に一度読んでみるだけでも、教員としての在り方に対する意識が高まる機会になると思います。さらに、これには具体的な留意事項も書

かれています。例えば近年「ブラック校則」の問題が話題になっていますが、校則に関する項目も設けられており、「校則の内容は、社会通念に照らして合理的とみられる範囲内で、学校や地域の実態に応じて適切に定められる。教員がいたずらに規則にとらわれて、規則を守らせることのみの指導になっていないか注意を払う必要がある」とまとめられています。さらにもう一冊、基本を押さえる上で欠かせないものに『いじめ対応ハンドブック（平成三一年三月県教委）』があります。いじめが深刻な問題であることは誰もが知っていますが、いざ防止に向けて対応しようとすると、うまく進まないことも少なくありません。私の経験の中でもそう感じたことが何度もありました。この冊子は見やすくまとめてあり、私は常に所持しています。実際にいじめの認知があったときに読み、抜けていることはないかをチェックしています。この二冊で、確かな「基本」を知ることができるはずです。「基本を押さえた」上で自分の考え方をもてれば、さらに素晴らしい指導ができると思います。

二つ目は、研修を大切にすることです。私は講話や研修の内容を理解するのはもちろんのこと、研修で講師の方に紹介していただいた本を必ず読むことにしています。今まで紹介していただいた本は自分の刺激になり、自分の見識を高めてくれました。

三つ目は、危機管理の意識をもつことです。他のクラスや学校での出来事、世の中の学校関連のニュースなどに関し、自分のクラスや学校で起きたらという視点で、自分ならどうするか、自分の学校ならばどう対応するのかを考えてみる。この姿勢がクラス、学校の点検・評価や改善につながり、不測の事態にも落ち着いて対応ができるようになるのではないかと思います。

県立小山南高等学校　栗原　英男

心に留めている二つのこと

ありきたりではありますが、「経験から学ぶ」ということを大切にしたいと思っています。教育相談を長く担当してきたことで、生徒指導や保護者面談に関わる機会が数多くありました。経験豊かな先輩方がどう指導・対応するのかを目の当たりにできたことは私の大きな財産です。またそういった機会でなくとも、日々の様々な（特に困難な）場面で、年齢やキャリアを問わず尊敬する同僚たちがどう考え、判断し、行動するのか、自分ごととして捉えていくことは、間接的な経験として得るものが大きいと考えています。

そして私がこれまでに最も実感を伴って学んだのは、生徒・保護者・同僚、そして自分の「感情を大切にする」ことの重要性です。「感情的」という語は、理性に欠け、自律できないことと同義で使われるためか、私は感情というものに負の印象をもっていました。しかしどんなに理性的であろうと試みても、我々は感情や潜在意識に突き動かされて行動しているといいます。自分勝手にこれをむき出しにすることは論外ですが、過度に抑圧し、思考と感情が一致しない状態が続くと、辛さや悩み・体調不良に繋がります。自他の感情をないがしろにすると様々なところで無理が生じ、うまくいかないのが実感です。

面談は生徒との信頼関係を作る大きな機会ですが、「何か有用な助言や情報を提示しなければ」という気負いもありました。もちろんそれが絶対に必要な場面もある一方で、それを求め受容できる状態の生徒ばかりではありません。聴いたり待ったりする姿勢の大切さを知ってからは、面談で生徒が話したいことを話せたかという視点を意識することを心掛けました。自分の気持ちを素直に出す生徒も中にはいますが、むしろ真面目で悩みの深

い生徒ほど自分の感情に無自覚な気がします。思考がぐるぐると渦巻いて混乱し、まさに「自分の気持ちが分からない」状態です。話すことで「そうか、私は今、不安なんだ」と自覚するだけでも安心や信頼に繋がることは、私自身の経験を振り返っても言えることです。安心や心の安定があってこそ、行動する意志やエネルギーに繋がると思います。

保護者への対応が困難だったケースを思い返すと、ほぼ感情的なこじれが原因であった気がします。また同僚との関係性においても、「理屈では分かるけれど…」と今一つ気持ちよく物事を進められない事態を避け、スムーズに協働するためには、やはり事実や理屈のみならず、お互いの感情を尊重することが大切なのではないでしょうか。

大学卒業後、深く考えずに流されて教職に就いた私が、自らを振り返る機会を頂きました。そして、これまで述べた「感情」と「経験」、この二つは私にとってこの仕事のやりがいや魅力そのものに直結するものだと気付きました。紙面の関係で具体的に述べられないことが残念ですが、私の心に残る場面の数々は、うれしさや悔しさ、寂しさや充実感、全て生徒・保護者や先生たちとこれらの感情を確かに共有できたと実感した瞬間です。またこの仕事は、欠点も含めた自分の個性や今までの経験、いわば自分の全てを生かしていける仕事です。経験が私たちの価値観や個性を形作っていくのだとしたら、むしろ失敗や挫折があるからこそ他者と良い関わりができるのではないかとも考えます。困難の渦中は先も見えず、生徒や保護者の言動に傷つくなど負担もあります。公私ともにトラブルや困難は無いに越したことはありません。しかしたとえそれらに直面しても、周りの助けも借りながら何とか乗り越えることで、より深く、寛く、大きな自分になれたらと思っています。

県立小山西高等学校　野口　章代

子どもたちと保護者から学んだこと

「特別支援学校における進路指導について」というテーマで、このお話をいただきましたが、実は進路指導を担当するようになって、さほど経験を重ねておりません。現在は、学校と社会の間に軸足を置いて教育に当たっていますが、以前は、訪問教育学級や早期教育相談の担当として、学校と家庭の間で、子どもたちだけでなく、保護者に近いところで教育に携わってきました。その頃の経験は、教師として自分が歩む道標となっています。

訪問教育学級。それは、障害や病気のために学校に通うことが難しい子どもたちのために、教員が家庭や病院に赴き教育を行う学級です。児童生徒と私の二人だけでなく、時には保護者も一緒に授業に参加しました。訪問教育学級を担当していたときに出会った保護者は、様々なことを乗り越えてこられた強さからか、明るく前向きな方が多く、こちらが元気をもらうことも多々ありました。しかし、そんな保護者が一様に表情を曇らせ、不安な心の内を吐露するのは、決まって、我が子の進路についての話題になったときでした。「障害から卒業後の受入れが難しいのではないか」「将来親が年を取ったときにこの子はどのように生きていくのか」。そのようなことを口にする保護者からは、我が子の自立、幸せを切に願う親の愛をひしひしと感じました。児童生徒、保護者の不安を少しでも軽くし、親子で前向きに将来に向かい合えるよう、教師として自分は何をすべきか考えるとき、いつも思い出されるのは、我が子の将来を思う保護者の表情です。

そして、発達に不安のある就学前のお子さんと保護者に教育相談を行う、早期教育相談。この時に学んだことは「子どもを多面的に見る」ことの重要性です。早期教育相談室に保

護者とやってくる子どもたちはときに甘えたり、時に保護者に褒めてもらいたくて目いっぱい頑張ったりします。その子どもたちがその後、小学部の一年生として入学してくると、今まで早期教育相談室の中では見られなかった姿、保護者から聞いた家庭での姿とは、全く異なる姿を見せることが多々あります。教師は、学校で見られる子どもたちの姿でその子を理解しようとしがちですが、学校での姿が全てではありません。教師の前では、子どもたちは「いい子」として振舞おうとしているかもしれませんし、教師も知らず知らずのうちに子どもたちにそれを期待しているかもしれません。また、当然その逆で、家庭でそのような姿を見せることもあるでしょう。私自身、子どもを「児童生徒」という学校の枠組みの中だけで「理解した」と思い込み、子どもがもっている豊かな個性、可能性を見落としてしまいそうになることがあります。そのようなときに、ふと子どもを多面的に見ることを思い出させてくれるのが、早期教育相談で子どもが見せてくれた表情です。

さて、進路指導と、訪問教育学級や早期教育相談での指導は、一見分野の異なるものに見えますが、学校とどこかの間に立って児童生徒の指導に当たるという点では同じです。学校と社会の間に立ってみたときに、社会で生きる子どもたちの姿を想像して「児童生徒」としての子ども像を相対化することによって、子どもたちが自分らしく生きていく道が見えてくるということがあると思うのです。そのような意味では、進路指導は、単に学校から社会へのスムーズな移行を実現させるためだけのものではなく、子どもたちが、社会の中で己の個性や可能性を発揮しながら、自分らしく生きる道を見つけるための支援であり、それが我が子の幸せを心から望む保護者の願いを叶えるものだと思うのです。

県立南那須特別支援学校　小林　奈津美

コラム

よりよい児童・生徒指導のために

「児童・生徒指導」という言葉からは、トラブル対応というイメージが浮かぶかもしれません。確かに、子どもたちの抱える問題を解決し、安全・安心を保障するのは大切なことです。しかし、子どもたちの自己実現や社会的自立のためには、トラブル対応のような「課題解決的な指導」はもとより、「予防的な指導」や「成長を促す指導」にも力を注ぐことが大切です。

では、これらの指導の際にはどんなことを心掛ければよいのでしょうか。子どもたちの年齢や状況の違いによって心掛けるべきことは異なるでしょうが、本冊子の内容のように「みる」「きく」「寄り添う」「認める」が鍵になると思います。子どもたちの様子をよくみて、思いや考えをじっくりきき、その気持ちに寄り添い、一人一人を認める。そんなことは当たり前だと感じるかもしれません。しかし、「慣れ」や「思い込み」「焦り」などによって、その当たり前がおざなりになってしまうこともあるのではないでしょうか。

教職員間で情報を共有したり、声を掛け合ったりすることで、子どもたち一人一人の様子や気持ちを把握して、よりよい指導の在り方をみんなで考えていきたいものですね。

関係資料のご案内

「児童生徒への適切な指導のために～一人一人を『認める』～」
栃木県総合教育センター
2019 年 3 月

「児童生徒への適切な指導のために～子どもの理解を深める～」
栃木県総合教育センター
2020 年 3 月